

神学英語訳本

ヨハネの福音書1章1節~18節より

ロゴスという言葉を用いた福音提示について

TTS 教職志願者コース3年 野町 真理

- 1:1 Εν αρχη ην ο λογος, και ο λογος ην προς τον θεον, και θεος ην ο λογος.
- 1:2 ουτος ην εν αρχη προς τον θεον.
- 1:3 παντα δι αυτου εγενετο, και χωρις αυτου εγενετο ουδε εν ο γεγονεν.
- 1:4 εν αυτω ζωη ην, και η ζωη ην το φως των ανθρωπων
- 1:5 και το φως εν τη σκοτια φαινει, και η σκοτια αυτο ου κατελαβεν.
- 1:6 Εγενετο ανθρωπος απεσταλμενος παρα θεου, ονομα αυτω Ιωαννης
- 1:7 ουτος ηλθεν εις μαρτυριαν, ινα μαρτυρηση περι του φωτος, ινα παντες πιστευσωσιν δι αυτου.
- 1:8 ουκ ην εκεινος το φως, αλλ ινα μαρτυρηση περι του φωτος.
- 1:9 Ην το φως το αληθινον, ο φωτιζει παντα ανθρωπον, ερχομενον εις το κοσμον.
- 1:10 εν τω κοσμω ην, και ο κοσμος δι αυτου εγενετο, και ο κοσμος αυτον ουκ εγνω.
- 1:11 εις τα ιδια ηλθεν, και οι ιδιοι αυτον ου παρελαβον.
- 1:12 οσοι δε ελαβον αυτον, εδωκεν αυτοις εξουσιαν τεκνα θεου γενεσθαι, τοις πιστεουσιν εις το ονομα αυτου,
- 1:13 οι ουκ εξ αιματων ουδε εκ θεληματος σαρκος ουδε εκ θεληματος ανδρος αλλ εκ θεου εγεννηθησαν.
- 1:14 Και ο λογος σαρξ εγενετο και εσκηνωσεν εν ημιν, και εθεασαμεθα την δοξαν αυτου, δοξαν ωσ μονογενουσ παρα πατρος, πληρης χαριτος και αληθειας.
- 1:15 Ιωαννης μαρτυρει περι αυτου και κεκραγεν λεγων, Ουτος ην ον ειπον, Ο οπισω μου ερχομενος εμπροσθεν μου γεγονεν, οτι πρωτος μου ην.
- 1:16 οτι εκ του πληρωματος αυτου ημεις παντες ελαβομεν, και χαριν αντι χαριτος
- 1:17 οτι ο νομος δια Μωυσεωσ εδοθη, η χαρις και η αληθεια δια Ιησου Χριστου εγενετο
- 1:18 θεον ουδεις εωρακεν ποποτε μονογενησ θεοσ ο ων εις τον κολπον του πατροσ εκεινοσ εξηγησατο.

1.はじめに

ヨハネの福音書はよく求道者やクリスチャンになっただけの人にわかりやすいということで読むことを勧められる。しかし、私自身はこの福音書をあまり深く掘り下げず、非常に表面的に読んでいるように感じている。最初のプロローグの部分においても、なぜ著者がロゴスということばを用いて福音提示をしているのかがよく解らない。幸いにしてレオン・モリスの本の中にロゴスについての深い洞察が記されていたのでそれを述べながら[1]、ロゴスについてのワードスタディを行い、なぜヨハネの福音書の著者はロゴスということばを用いて福音提示をしているのかを考えてみたいと思う。

2、ロゴスについてのWORD STUDY

A、ギリシャ人のロゴスに対するイメージ[1][4]

*logos prophorikos：誰かから出たことば。言い換えると、他の誰かとコミュニケーションするために語られたり書き記されたりされたことば。この用語は現代の私たちのイメージと同じなので問題はない。

*logos endiathetos：語られたり、書かれたりしたことばではない。私たちのmindの中にある理性のように何が理にかなったことかを判断する。現代人にはこのようなイメージはない。すべての人間の最も重要な部分を指し示すことば。

このロゴスの用法は人間を越える何かを言い表す時にも用いられる。ギリシャ人が宇宙を見るとき、あらゆる面においてそこに秩序を見いだす。私たちは巨大で恐れを抱かせるような無秩序な世界に住んでいるわけではない。予想できるように毎日規則正しく太陽は昇り、そして沈む。星は規則正しく軌道に従って動き、天文学者や数学者が予測する時にその場所に現れる。季節も規則正しく移り変わっていく。農夫が種を蒔くと蒔いたものを刈る取ることができる。なぜこの宇宙は美しく秩序立っていてカオス（無秩序・混沌）ではないのか？彼らがそのような疑問を考えると、彼らの何人かの哲学者は「なぜなら宇宙には”ことば”が存在するから。ちょうど人間の中に理性が存在するように、この美しい宇宙の中には理性のような”ことば”が存在する。」と答えた。彼らは理性を知覚する。秩序づける原理、宇宙に存在するすべてのものに働くものとして。

ヘラクレイトス

B.C.6世紀の哲学者ヘラクレイトスは「万物は流転する」とか、「人は同じ流れにふたたびはいることはできない。」ということばを残している。彼は”ことば”を神とも表現できるものとした。彼は神、火、そして”ことば”という用語を同じようなものとして用いていた。

ストア派の哲学者

ストア派の哲学者はロゴスということばの概念を築き上げた。彼らは宇宙を理性に満ちているものとして見、それをロゴスと呼んだ。この用法は宇宙は理にかなっているものだという彼らの深い洞察を示す。ストア派の哲学者はロゴスを人格を持ったものとは考えなかったが、原理、力であると考えた。

紀元1世紀のギリシャ世界において、ロゴスということばのイメージは以下のものであったと思われる。一般の人々は哲学者が用いていたロゴスということばの意味を十分理解していたわけではなかった。しかしそのことばが非常に重要な誰か、あるいは何かを指し示していたことは理解していた。したがってクリスチャンでないギリシャ人がヨハネの福音書を最初に読んだとき、私たち現代人が感じる奇妙なイメージを持つことはなかったであろう。彼らは著者ヨハネが意図したことをすべてくみ取ることはできなかったであろうが、ロゴスというものが最も重要な存在あるいは原理であることは理解したと思われる。

B、ヘブル人のロゴスに対するイメージ[1][4]

ヘブル人の”ことば”の理解はギリシャ人のものとは異なっている。活動的な神のことば、知恵についての旧約聖書の眺望からその理解が得られる。例えば「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいふきによって。（詩編33：6）」

旧約聖書のダバール（ことば）について

ダバール（ことば）は出来事と訳せる。

神のことばは神の意志を行うことにおいて活動的である。

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。（イザヤ55：10-11）」

私たちは普通”ことば”という語をこのような用法では用いない。しかし、ユダヤ人はこのようなダイナミックな用法における”ことば”の理解に対して何の抵抗もない。彼らは神のことばと言えば神の活動を連想する。

ユダヤ人は知恵についても似たような考えを持っている。箴言8章には生き生きした知恵の擬人化が見られる。

「主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。
大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。
深淵もまだなく、水のみなぎる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。
山が立てられる前に、丘より先に、わたしはすでに生まれていた。
神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。
神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。
神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、
地の基を定められたとき、わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。
わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。（箴言8：22-31）」

創世記1章

神のことばによる天地創造

(アレクサンドリアのフィロン ログスーキリスト論)

新約聖書の中でのロゴスの用いられ方[2]

新約聖書に330回用いられているロゴスは、それぞれの独立した書物に比較的バランスよく出てくる。福音書に129回（マタイ33、マルコ24、ルカ32、ヨハネ40）、使徒の働きに65回、疑いのないパウロ書簡に48回、コロサイ（7）、エペソ（4）、Ⅱテサロニケ（5）、ヘブル（12）、牧会書簡（20）、黙示（18）、ヤコブ（5）、ⅠとⅢヨハネ（7）、ⅠとⅡペテロ（10）。

ピレモンとⅡヨハネとユダだけにロゴスは用いられていない。歴史的なイエスの現れである絶対的ロゴスとしての用法はヨハネの福音書のプロローグ（ヨハネ1：1、14）とⅠヨハネの書き出し（1：1）において見られ、他の用法に比べて際立って突出している。

ヨハネの福音書のプロローグについて[2]

ヨハネの福音書のリズミカルに構成されたプロローグ（1：1-18）の理解において、このプロローグが初期のクリスチャンのロゴス賛歌の注釈書のような改作であるという見解がある[2][3]。それは特殊な用法としてキリストご自身を人格的なロゴスと同一視する。

この“ロゴス賛歌”を再構成する様々な試みはキリストの罪のあがないの方法について述べられるときに一点に収束する。それはテキスト自身から読み取ることができる。

キリストの永遠からの先在（1a）、

神との人格的な交わり（1b,2）、

ロゴスは創造において全てを包含する働きを持っている（3）、

世のための救いにおける働き（仲介者として光といのちをもたらす）（4）。

受肉というかたちでこの人間世界にロゴスが来られたことは5節から論じはじめられている。

明確な編集の作業（6-8, 15に見られるバプテスマのヨハネに関する文章は明らかに編集によって挿入されている）は神の栄光におけるロゴスの歴史的に感知できる完全なリアリティを加えている（14b）。

（14a *Και ο λογος σαρη̄ς εγενετο* はこの世の一時のはかなさにおいて完全な受肉の出来事を表現している。）これらの受肉に関する見解はこの“賛歌”がおそらくヘレニズム化されたユダヤ教の世界からのものであるが、そのままクリスチャンに源を発していることを指し示す。

ヨハネの福音書のプロローグとヨハネの手紙第一の書き出し（1：1-4）との間の霊的なそして文学的な関係は非常に多くのテキストのつながり（例えばアルケーとゾーエーについて述べられていること）だけではなく、いのちのことば（*λογος της ζωης* Ⅰヨハ1:2）としてのロゴスの中心的位置において見られる。その本質は歴史的な時間の中で信仰の目に対してベールを取る。

なお、ヨハネは以下のような集中構造を用いて12節を中心主題として強調し、また、その前後において、この方をどのような方として受け入れるべきかを説明していると思われる。

・集中構造によって強調される中心メッセージ

(この方を受け入れた人々に対する神の約束)

A 1 : 1 - 5 父とともにおられたひとり子の神、ことば (ロゴス) なるイエス・キリスト
— 永遠の先在者、神、すべてのものの創造者、いのち、人の光

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。

造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

B 1 : 6 - 8 バプテスマのヨハネの使命 (まことの光を反射して指し示す鏡のような存在)

1:6 神から遣わされたヨハネという人が現われた。

1:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、
すべての人が彼によって信じるためである。

1:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。

C 1 : 9 世に来られることば—すべての人を照らすまことの光として

1:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。

D 1 : 10 - 13 この方と世の関係—この方を受け入れなかった民と受け入れた人々

*この方を受け入れなかった民

1:10 この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

1:11 この方 (主人) はご自分のくに (家) に来られたのに、ご自分の民 (子ども) は受け入れなかった。

*この方を受け入れた人々

1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、
神の子どもとされる特権をお与えになった。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、
ただ、神によって生まれたのである。

C' 1 : 14 世に来られたことば—ことばなる神の受肉と栄光、恵みとまこと
父のみもとから肉体を持った人間として世に来られたひとり子 (ことば)

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。

父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。

この方は恵みとまことに満ちておられた。

B' 1 : 15 バプテスマのヨハネの証言

1:15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。

「私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである。」
と私が言ったのは、この方のことです。」

A' 1 : 16 - 18 父のふところにおられるひとり子の神、ことばなるイエス・キリストによる
神の自己啓示と恵みとまことの実現

1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、
恵みの上にさらに恵みを受けたのである。

1:17 というのは、律法はモーセによって与えられ、
恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、
神を説き明かされたのである。

ヨハネの文章の中での神のことばの理解 [3]

ヨハネの福音書は共観福音書のように（マルコ 4：14、ルカ 5：1 参照）イエスの説教を”神のことばの”宣言として示している。イエスのことばは父なる神のことばであり、そのことばの中に父なる神の働きが表されている（ヨハネ 14：24、3：34、14：10、17：8）。したがってだれでもイエスのことばを聞き、それらを信仰によって受け入れる者は神のことばを聞くのである（ヨハネ 5：24、8：51、12：48、14：24、15：3、17：14、17）。なぜならイエスのことばは同時に父なる神のことばだからである。それゆえにイエスのことばは救いのことば（ヨハネ 14：14）であり、真理（ヨハネ 17：17）である。これがなぜイエスのことばが信じる者の内にいのちを与え（ヨハネ 5：24）、そして信じない者に裁きを与える理由である。イエスが語る”神のことば”はその全体で人間に対する神の自己啓示”である。

神のことばとしてのイエスのことばということは、イエスがことばとして存在しているということにその土台を置いている。

3、Discussion

なぜヨハネの福音書の著者はロゴスということばを用いて福音提示をしているのか？

ロゴスであるイエス・キリストの受肉という出来事は聖書の中で最も驚くべき福音の中心的出来事である。それは静かに、しかも全宇宙に響き渡る出来事である。なぜならそれは永遠から存在され、天地を創造された神のひとりご自身が私たちと同じ肉体を持たれ、この世界に来て私たちの間に住んで下さったというメッセージだからである。

ヨハネの福音書の著者はギリシャ世界に住んでいるまだイエスをキリストとして受け入れていない人々に向かってこの福音書を書き記した。彼のプロローグにおけるロゴスということばを用いた福音提示は聖霊によって導かれた中で非常に考え抜かれた文章であると考えられる。なぜなら彼はギリシャ人が持っているロゴスのイメージにヘブル人が持っているロゴスのイメージと、キリストを信じた視点から見たロゴスのイメージを融合させているからである。20世紀のドイツの哲学者ガダマーのことばを借りれば「地平の融合」、つまり先入観という現在の地平と過去の地平との融合がこのロゴスによる福音提示において見事になされている[5]。

「私たちは誰でも、生まれ育ってきた歴史的、生活環境的先入見を持っている。どのような過去の出来事を解釈する際にもこの先入見を白紙にすることはできない。いやむしろ、現在持っている先入見という地平を土台にして、過去のテキストが語りかけてくることばに耳を傾け、問いかける対話を繰り返しながら、自分のイメージを少しずつ聖書の映し出すイメージへと修正していくことが解釈し、理解するということである。」

受肉されたロゴスとしてのイエス・キリストをはっきりと指し示すキリスト教信仰の視点においてギリシャ人やヘブル人の先入観とイエス・キリストによって啓示された神観が融合している。そこにおいてギリシャ人が見た秩序ある宇宙の根源のイメージとヘブル人が持っていたダイナミックな出来事としてのイメージが重なり合っている。

参考文献

- [1] Leon Morris, "Reflections on the Gospel of John Vol.1 --- The Word was made fresh", Baker, 1986
- [2] "Exegetical dictionary of the New Testament Vol.2", Eerdmans
- [3] "The New International Dictionary of New Testament Theology Vol.3", Editor: Colin Brown
- [4] 由木康, "イエス・キリストを語る", 講談社学術文庫
- [5] 丸山高司, "現代思想の冒険者たち 12 ガダマー --- 地平の融合", 講談社